

2025 年 8 月 3 日（日）「6 6 6 を超えて」

ヨハネの黙示録 13:11-18

11 また私は、もう一頭の獣が地中から上って来るのを見た。この獣には、小羊に似た二本の角があつて、竜のように語った。12 この獣は、第一の獣が持っていたすべての権威をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に、死ぬほどの傷が治った第一の獣を拝ませた。13 そして、大きなしるしを行って、人々の前で天から地上へ火をも降らせた。14 さらに、第一の獣の前で行うことを許された数々のしるしによって、地上に住む人々を惑わせ、また、剣の傷を負ったがなお生きている第一の獣の像を造るように、地上に住む人たちに命じた。

15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そして、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることでもできないようにした。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵がある。理解ある者は、獣の数字の持つ意味を考えるがよい。数字は人間を指している。そして、その数字は六百六十六である。

【序論】

「666」——この数字は、黙示録読者のみならず、今や世界中で知られる“象徴”となっています。政治家、芸能人、スポーツ選手の間でも、このサインを手で示すことが流行し、バーコードや特許番号などにもこの数字が登場する場面があります。陰謀論的な文脈において語られることも多く（キリスト者も知っておく必要がある）、「反キリスト」「世界政府」「人工知能の暴走」といったテーマと結びつけられることもあります。黙示録の注解書を読むと伝統的な解釈を知ることができますが、時代を経てその読み方の幅が大きく広がりました。別の言い方をしますと、このことばは「重層的な意味を持つようになった」のです。そして、これは大変興味深いテーマであり、黙示録を扱う上で避けて通ることができません。それと同時に、私たちが本当に問うべきなのは、この数字そのものよりも、「誰の声に耳を傾け、何に従って生きるか」という根本的な問いであることを忘れてはならないでしょう。今日はこの 13:11-18 から、今の時代に響くメッセージを受け取っていきたいと思います。

【本論】

本論 1. 第二の獣（11-14a 節）

ここに登場する「もう一頭の獣」は、13:1-10 に出てきた「獣」とは別物です。第一の獣は「十本の角と七つの頭があり、角には十の王冠、頭には神を冒瀆する名があつた。私が見たこの獣は豹に似ていて、足は熊のようで、口は獅子のようであつた」（13:1-2）という出立ちであり、

見るも恐ろしい存在でした。それに対して第二の獣は、小羊のような角を持ちながら、竜のように語るといいます。外見は一見優しく、宗教的、平和的に見えるかもしれません。しかし、実際にはサタンの声を代弁する存在なのです。これは、初代教会の文脈では、皇帝礼拝を民衆に強制するローマ帝国東方の総督や、宗教的代理人を象徴していると理解されてきました。前回の説教の中で、「第一の獣」とは皇帝ネロの再来、または皇帝ドミティアヌスを指している可能性があると言明させていただきました。いずれにしても、統治下にある属州の民すべてに礼拝を求める強権的存在であり、そのような宗教的圧力の下でキリスト者は苦しんだのです。ところが、今日登場する「第二の獣」は、優しい言葉を用いながら第一の獣を礼拝させるために人々を誘導する「偽預言者」としての役割を果たす存在です。

現代においても、外見は「羊のよう」でも実際には人々を真理から遠ざける「異端的教え」を語る「偽預言者」が存在します。それは、教会内部にまで入り込み、福音の真理を少しずつ曲げ、内側から崩しにかかるかもしれません。歴史の中においても、あたかも「神によって立てられた指導者」と煽り立てられながら、その行動の実態は悪魔的である人がたびたび登場するのを見るでしょう。政治的指導者だけではなく、思想、宗教、あるいはテクノロジーまでもがその役割を果たしうるのである。

「第二の獣」が「大きなしるし」を行なうことで、人々が彼を「真の預言者」だと信じて行ったという描写もあり、これはあらゆる時代の信者が注意しなくてはならない点です。

「天から火を降らせる」など、預言者エリヤを思わせるような奇跡を行ないますが、黙示録の文脈では奇跡は必ずしも神からのものとは限りません。神に敵対する者も、人々を惑わすために「しるし」を用いるのです。旧約において、一つの象徴的な記事があります。

モーセとアロンはファラオのもとを訪れ、主が命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をファラオとその家臣の前に投げると、杖は大蛇になった。しかし、ファラオも賢者や呪術師らを呼び出した。エジプトの魔術師たちもまた秘術によって同じように行った。それぞれ自分の杖を投げると、大蛇になったが、アロンの杖が彼らの杖を呑み込んだ。(出 7:10-12)

この記事によると、神に敵対する者も「秘術」を用いることがあるという事実が認められます。しかし、不思議な業だけを見て驚いて、信じてしまっただけではいけません。その「結ぶ実」が本当に福音であるか、神へのまことの礼拝に至るものであるかどうかを、私たちは見極めなくてはならないのです。「**第一の獣の前で行うことを許された数々のしるしによって、地上に住む人々を惑わせ**」(14 節)とあるように、「目に見えるしるし」は「惑わし」となりやすい。主イエスもこのように弟子たちに警告されました。

「偽預言者に注意しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

(マタイ 7:15-20)

本論 2. 獣の刻印 (14b-17 節)

さて、「第二の獣」は、「第一の獣」の像を人々に作らせます。なぜ町に権力者の像を据えるのか。これは、権力者を神格化するためであり、その力を誇示するためです。これと酷似した出来事がユダヤ社会でも繰り返し行なわれてきました。第一世紀の初頭にローマ皇帝であったカリグラ（在位：37-41 年）は、自分の像をエルサレム神殿に立てることを要求しましたが、それは彼の死によって実現しなかったものの、ユダヤ人の間に大混乱を巻き起こしました。このようなことが当時繰り返され、時を経て、あらゆる時代に諸国の支配者が同質の暴挙を行なっています。

「像に息が吹き込まれて語る」（15 節）という描写は、かつては腹話術や仕掛けと解釈されてきました。像から声が出るという不思議を目の当たりにして、崇拜した人々が多くいたのでしょう。しかし、目の醒めた信者たちはその欺瞞を見抜き、神ならぬものを礼拝することを拒みました。そして、その多くの者が殉教したといえます。

このことを少し、現代的に考えてみましょう。現代に生きる私たちにとって、生成 AI、ロボット、バーチャルアバターなど、「語る像」が現実のものとなってきました。これから先、AI は指数関数的に成長していくことが予測されており、AI とどう関わって生きていくかが教会にも問われる時代に直面しています。このテクノロジーとの共存を避けていては、瞬く間に時代に取り残され、生き残ることはできないでしょう。私自身も生活の多くの側面で AI を有効に活用する道を見出し、そこに可能性と実益を感じています。しかし、同時に「それが神に取って代わるものになってしまう危険性」にも敏感でなければならないと常に心に銘記しています。なぜなら、「神ならぬもの」の声を「神の声」に置き換えてしまう危険性があるからです。つまり、あらゆることを AI の判断に任せるようになると、人間の主体性が失われ、霊的感性をもって神の声を聞き分けることができなくなってしまうということです。

当時のローマ帝国では、皇帝礼拝を実施した者に「証明書」が与えられ、それがないと市場で売買ができなかったと言われています。この「証明書」は「刻印」と呼ばれ、まるで奴隷が主人の所有物であることを示すために烙印を押されたようなイメージでしょう。人々は「私は皇帝崇拜をしました」という証明書を呈示することで、お店での売買が可能となったのです。これはおそらく、ローマの中心都市において実施された「宗教的・政治的拘束」であり、皇帝崇拜を拒否した者は社会から抹殺されたという恐ろしい時代を描いています。

私たち読者は、この構造も現代的に解釈する必要があるかもしれません。国民一人ひとりに一方的に当てがわれた「マイナンバー」。それは、今後導入されていくと思われるデジタルカレンシー、ベーシックインカム、QRコード決済などと接続して考えることもできます。国家が要求してくる「何か」に応じなければ、財産が没収されるという危険性がある。

「刻印」とは何か。それは「従属のしるし」、あるいは「それなしでは生きていけない」という依存のしるしです。ここで問われているのは、「何に生かされているか」「何を信じて日々を選択しているか」という霊的な所属の問題なのです。

本論 3. 「6 6 6」とは (18 節)

さて、最後に 18 節の「6 6 6」という数字について考えてみたいと思います。この「6 6 6」はゲマトリア（文字と数字を対応させる手法）で第一義的には「ネロ・カエサル」（ネロン・ケサル）を指すと考えられています。「NRWN・QSR」に相当するヘブル語の七つの子音は、文字ごとに数字を表しており、その合計が「6 6 6」となるのです¹。つまり、本書が書かれた当時、著者はこの暗号を用いることで暴君ネロの名前を伏せる形でローマ皇帝への帰属を拒否したということになります。

また、「7」が完全数とされることから、「6」が三つ並ぶことは「悪と不完全さの三位一体」「神になり損ねた人間の象徴」とも読める。すなわち、その支配は一時的であり、その統治が間もなく終わることを暗示していた可能性があります。

さて、この数字は今や世界的に知られるようになり、実に多くの意味が包含されています。以下にその例を挙げてみましょう。

①終末論的・黙示的解釈（象徴主義と未来主義）

(1) 終末に現れる実際の人物や制度

未来の「反キリスト」の個人または組織に関係するコード（例：世界統一政府、反キリスト的 AI、巨大企業、ある国のリーダーなど）。

(2) 実在する経済的・技術的「刻印」との関連

マイクロチップ埋め込み、ワクチンパスポート、デジタル ID (DID)、666 コード付きのバーコードなどに関連づける解釈。

②陰謀論的解釈（現代的文脈）

(1) フリーメイソン／イルミナティ陰謀論

666 は支配階層の「悪魔的サイン」とされる。ピラミッド、プロビデンスの目、数字、芸能界などにシンボルが現れるとされる。

(2) 世界金融支配・中央銀行陰謀論

IMF、世界銀行、FRB、デジタル通貨などの背後に「666 の支配」があると考え人もいる。

(3) AI と獣の像の一致

「ものを言う像」（黙 13:15）を、生成 AI、ロボット、バーチャル支配者と関連づける説も急増中。

666＝サイバー支配の象徴という見方。

¹ N (50) + R (200) + W (6) + N (50) + Q (100) + S (60) + R (200) = 666

私は陰謀論に偏りすぎることに注意していますが、世の人々の聖書の読み方にも目を凝らしつつ、「人間が神の座に座ろうとする」構造に対しては、靈的警戒をもって見つめたいと思っています。

【結論】

黙示録 13 章の中心にあるのは、「誰の声を信じて従うか」という問いです。「語る像」は、今も私たちに語りかけています。AI かもしれない。SNS かもしれない。あるいは、世の中の空気かもしれません。それに心を明け渡すのか、それとも、静かな御声に従うのか。私たちは、小羊なるイエスに属する者として、「神の刻印」を受けた者として生きていきたいと思っています。自分の目で聖書を読み、自分の頭で考え、神の声を聞き分ける感性に磨きをかけ続けてまいりましょう。

【祈り】

静かな御声をもって語りかけてくださる天の父なる神様。私たちの霊の耳が常にあなたに対して開かれているように、聖霊をもってこの心を整えていてください。惑わしに満ちた世に生きる私たちが、真に聞き分けるべき真理に耳を傾けることができますように。ただ主イエスの御足の跡を辿り続ける人生を、一人ひとりに歩み抜かせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
まことの「道」「真理」「いのち」として、ご自身の足跡を示しておられる、主イエス・キリストの恵み、
細き御声により、一人ひとりの心に語りかけてくださる、父なる神の愛、
霊の耳を開き、聞き分けるべき真理を選び取らせてくださる、聖霊の親しき交わりが、
ここに集う一人ひとりと、その家族と、友人と、この時代を生きるすべての信仰者の上に、
今も後も、限りなく豊かにありますように。